冬の映画

ヒット作や話題作

『サムシング・エクストラ！　やさしい泥棒のゆかいな逃避行』（12月26日公開）は、フランスで2024年年間興行収入ランキング1位になったヒット作。逃亡中の宝石泥棒の親子が、障がい者施設のサマーキャンプに逃げ込んだことから起こる騒動を、フランスらしい皮肉も含めてユーモラスに描く。実際に障がいのある11人のアマチュア俳優が起用され、作品に深みを与えている。内気でサッカーが大好きなバティスト、入所者を全力で支援する明るくエネルギッシュなアリス。障がい者も支援者も、そして、なぜか泥棒親子も登場人物がみんな魅力的！　偏見、秘密、迷いを抱えた人たちが、誰かとの出会いや出来事を通して変わっていき、「特別なもの（サムシング・エクストラ）」を見つけていく姿が感動的。しっかりと笑わせながらも、全編を通して障がい者と彼らのそばにいる人たちへの敬意が貫かれている。ラストは温かな笑いと涙につつまれ、見終わった後、幸せな気持ちにさせられる作品だ。

『サムシング・エクストラ！　やさしい泥棒のゆかいな逃避行』
©2024 CINE NOMINE-M6 FILMS-AUVERGNE-RHÔNE-ALPES CINEMA-SAME PLAYER-KABO FILMS-ECHO STUDIO-BNP PARIBAS PICTURES-IMPACT FILM

前作でゲイカップルの老後問題を描いた、香港のレイ・ヨン監督の新作は**『これからの私たち - All Shall Be Well』**（公開中）。長年連れ添ったレズビアンカップルが、パートナーの急死によって直面する問題を描いた。60代のパットとアンジーは公私ともに順調で穏やかな日々を送っていたが、パットが急死してしまう。アンジーはパットの親族とも家族同然に付き合ってきたが、葬儀の形式について意見が対立。さらに香港の法律に従い、兄がパットの遺産を相続することに。二人で生涯暮らすはずったマンションの権利を奪われるなど彼女には受け入れられない。法律の厚い壁と根強く残る偏見に打ちのめされながら、アンジーが選んだ道は―。2024年・第74回ベルリン国際映画祭で、優れたLGBT映画に与えられるテディ賞を受賞。香港の深刻な住宅不足や就職難、経済格差も浮かび上がらせる。

『これからの私たち - All Shall Be Well』
©2023 Mise_en_Scene_filmproduction

心が重なり合う

『愛がきこえる』（1月9日公開）は、耳のきこえない父と娘の互いを思いあう絆（きずな）を描き、中国で大ヒットを記録した作品。父シャオマーと暮らす7歳の少女ムームー。小学校へは通わず聴者として父を支えながら、ろう者の仲間に囲まれ幸せな日々を過ごしていた。ある日、5年前に出ていった母が、娘を引き取りに来たことから、ささやかな日々がきしみ始める。シャオマーに扮するのは韓国のアイドルグループEXOのチャン・イーシン。幼い娘の幸せだけを願い、必死に働くシングルファーザーを熱演。当事者であるろう者の人々が俳優として多数参加し、そのコミュニティーの魅力が伝わる。

『愛がきこえる』©CKF PICTURES (Ningbo) Co., Ltd. / iQIYI Pictures (Beijing) Co., Ltd. / Shanghai Tao Piao Movie & TV Culture Co.,Ltd.

『CROSSING（クロッシング）　心の交差点』（1月9日公開）は、深い余韻が心に残る作品。トルコ・イスタンブールの街を舞台に、言葉も世代も文化的背景も異なる3人の人生が交差する姿をつづったロードムービーだ。ジョージアで暮らす元教師のリアは、行方不明になったトランスジェンダーの姪（めい）テクラを探すため、一人の青年とともにイスタンブールへ。しかし、見つけ出すのは難しく、トランスジェンダーの権利のために闘う弁護士エヴリムの助けを借りる。エヴリム役には、トランス女性のデニズ・ドゥマンリを起用。親しい人を失い、人生に惑うとき、ふとした心の触れ合いが支えになることに国境はない。

『CROSSING　心の交差点』©2023 French Quarter Film AB,Adomeit Film ApS,Easy Riders Films,RMV Film AB,Sverigas Television AB

『チャップリン』（12月19日公開）は、「喜劇王」の呼び名で知られる20世紀の映画スター、チャーリー・チャップリンのルーツに迫ったドキュメンタリー。ドタバタ喜劇に庶民の哀愁や社会風刺を巧みに取り入れた作品の数々で人々を魅了した。ちょび髭（ひげ）にだぶだぶのズボン、ステッキ、山高帽がトレードマークの放浪紳士には、ロマのアイデンティティーが。ロマは10世紀頃からヨーロッパを中心に世界中を移動してきた少数民族で差別と迫害を受けてきた。社会風刺に富んだ作品でユダヤ人・共産主義者のレッテルをはられたが、自身がロマの血を引いていることが誇りだったチャップリン。放浪紳士のルーツを探して、絶縁状態だったこともある息子マイケルが各地を訪ね歩く。ジョニー・デップらチャップリンを敬愛する著名人も登場。『独裁者』『キッド』などが引用され、改めて彼の作品を見たくなる。

『チャップリン』©The Caravan Trail, A.I.E, Kwanon Films Limited, and Submarine Sublime 2024 Charlie Chaplin™© Bubbles Incorporated SA

文化情報

演劇

■劇団民藝
風紋―この身はやがて風になりても―

岩手軽便鉄道の終着駅である仙人峠の駅舎に、男が意識不明で倒れていた。彼の荷物には原稿用紙の束と「宮沢賢治」という名前。外は嵐で土砂が崩れ、峠道は封鎖。旅人たちは幾日か駅舎で立ち往生するはめになる。賢治はなぜ、最後の生命をかけて仙人峠に来たのか…。岩手に生まれ、理想郷「イーハトーブ」として描いた詩人・宮沢賢治。2026年は賢治の生誕130年。彼が亡くなる2カ月前の数日間の物語だ。**作・長田育恵、演出・丹野郁弓**

2026年２月６日（金）～２月14日（土）／東京・紀伊國屋サザンシアターTAKASHIMAYA／一般7000円、夜公演5000円／問合せ　044-987-7711

■劇団銅鑼
HOPE～本を焼き尽くす悪魔～

中学生の優希は、古い蔵で時空を超えて3つの国の「焚書（ふんしょ）」にまつわるストーリーを経験する。焚書とは、宗教的、または政治的な反発により書物を焼却すること。2011年からはじまったシリア内戦下の町ダラヤでは、若者たちが秘密図書館をつくった。1944年～45年の日本では、旧日比谷図書館の蔵書およそ40万冊を、学生たちが大八車を押し、奥多摩へ疎開させた。リトアニアには、ナチスの迫害から自分たちの文化を踏みにじられまいと本を守った「紙部隊」がいた…。3つの旅を終えた時、優希はある決断をする。**作・斎藤栄作、演出・金澤菜乃英**

2026年２月25日（水）～３月８日（日）／東京・銅鑼アトリエ（東武東上線「上板橋駅」より徒歩10分）／一般5500円他／音声ガイドサービス日あり／問合せ　03-3937-1101